

第25回ふるさと展

古代寺院跡と畑田城址



畑田集落遠望

令和3年

9月4日(土)～10月14日(木)

【開館時間】 10:00～17:00 (入館は16:30まで)

【休館日】 月・火曜日(祝日開館)、9月24日(金)

【主催】 畑田自治会 愛荘町立歴史文化博物館

愛荘町立歴史文化博物館

畑田の外観

畑田の集落は、愛荘町の南部に位置する集落で、戸数は47軒(令和3年)の比較的小さな集落です。中世の集落は現在よりもやや南にあったといわれており、中世末に現在の位置に集落ができたといわれています。

この地域一帯には依智秦氏が集住したと考えられており、周辺より畑田稲荷古墳群(2基)、関係するであろう古代寺院跡(畑田廃寺)が発見されています。

中世になると、佐々木六角氏が近江南部を治め、このあたりはその支配下の土地領主が城館を設けていました。畑田にも城館の跡が残され、集落の北側には、東西200メートルに及ぶ土塁の跡が確認されました。写真右(昭和48年撮影)の中央が畑田集落で、林の辺りが城跡であり、土塁が残されています。



畑田集落付近の空中写真(昭和48年)

古代の畑田

昭和53年(1987)、畑田集落の南側で発掘調査が行われ、寺院の本堂基壇跡(写真下)をはじめ、掘立柱跡、井戸などが発掘されています。同時に多くの古代瓦や土器が出土しています。こうした出土物から、畑田廃寺は7世紀末に建てられた寺院であることが分かりました。出土した須恵器の中には幾つかの墨書が見つかっており、「僧寺」「寺」「三河」「祢」などの文字が確認されています。古代の寺院は僧寺と尼寺が対に建てられている例が見られ、畑田出土土器の「僧寺」というのは僧の寺を示し、同じ大国郷野々目廃寺が「尼寺」であったのではないかとされています。

また、出土した木簡には「秦」という文字が書かれており、この寺院が依智秦氏の一族によって建てられたのではないかと見られています。

さらに、畑田廃寺の南東に2基の古墳が発掘され、出土した土器から7世紀初頭のものと推測されており、人々の営みを確認できます。



写真は昭和57年(1987)に発掘中の畑田廃寺の様子。上半分が本堂基壇の跡で、東西30メートル程と推測され、金堂か講堂の跡と推測されます。

畑田廃寺発掘現場

畑田廃寺出土遺物

畑田廃寺からは白鳳期の瓦が数点出土しています。写真右は単弁蓮華文の軒丸瓦で、他にも唐草文様の軒平瓦が多数出土しています。

文字の記録には貴重な紙の代わりに「木簡」が使用されたのですが、畑田廃寺から字の練習をしたと見られる木簡が一点出土しています。墨書で「秦秦秦秦 大火……火火火」と記され、その意味は読み取れませんが、秦氏との関連が指摘されています。



畑田廃寺出土瓦

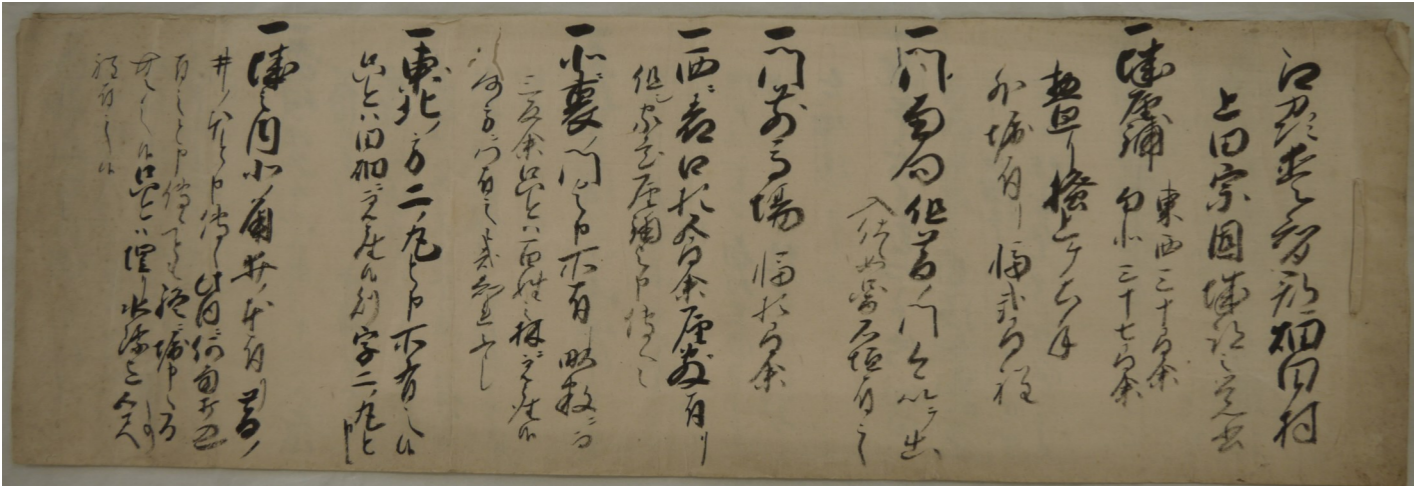
畑田城と羽柴長兵衛

畑田には集落の北側に東西200メートルに及ぶ土塁の跡が確認されています。現在はその一部しか見ることができませんが、残された土塁の高さは2メートル以上の高さで、築かれた当時は3〜4メートルであったと推測されています。中世末（戦国期）に築かれたとみられるもので、畑田城址の一部とされています。

畑田城は、集落の北側には土塁の跡が残りますが、城館の規模がよく分っていませんでした。しかし、享保6年（1721）正月に出された「江州依智郡畑田村上田宗固城跡之覚書」（広島県三原市教育委員会所蔵写真下）には、「城屋敷 東西三十間余 南北三十七間余」と記され、東西55メートル、南北67メートルほどの広さであったと思われます。また、南北に門があったこと、東北の方に二の丸があったことなど詳細に記されています。

この覚書は表題にあるように、上田宗固（簡）が城主であったと記していますが、『近江愛智郡志』『近江佐々木南北諸士帳』などにはその名前は見られず、「畑田屋敷主 羽柴長兵衛」、あるいは「羽柴長兵衛 古屋敷跡あり」などと記述されています。ここには、上田宗簡の名前では無く羽柴長兵衛の名前、畑田城主ではなく畑田屋敷主という表記になっており、くい違いが見られるのです。しかし、現在の城跡付近には羽柴家が住居されており、後者をを裏付けているように思われます。

さて、この覚書は奥付を見ると畑田村が発給した文書であることが分ります。享保6年に、芸州広島藩浅野家の家老格であった上田家が始祖である上田重安（宗簡）の業績を知るために畑田の村役人に書類を提出させたもので、記述される内容について大きな間違いは無いものと思われます。



「江州愛智郡畑田村上田宗固城跡之覚書」

上田宗簡について

宗簡は号。上田重安を名乗る。永禄6年（1563）に上田重元の子として尾張の愛知郡星崎村に生まれる。祖父の代より丹羽長秀の家臣で、各地を転戦して活躍した。

天正10年（1582）、織田信長が本能寺で襲われると、羽柴秀吉方につき、明智光秀との関与の疑いがかかった津田信澄（信長の甥）を大坂城に討果たす。

天正13年（1585）、丹羽長秀が死去して減俸されると豊臣秀吉の直参として越前に1万石を与えられる。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いで西軍につき、敗戦後は領地を没収され摂津に逃れ、剃髪して上田宗簡を名乗る。しかし、阿波の蜂須賀家政に強く請われ、客分として徳島城表御殿の作庭を行う。その後、姻戚関係にある紀州藩浅野幸長に乞われて還俗し、家臣となった。

慶長19年（1614）、大坂冬の陣に従軍、翌年大坂夏の陣では敵の大將塙直之の首級を上げる戦功を立てる。

元和5年（1619）、浅野家が芸州広島藩に移封されると同行して安芸佐伯郡小方に1万2千石を与えられ、浅野家の家老格として仕えた。

慶安3年（1650）5月30日に88歳で没した。

長男重秀は近江野洲郡に服部陣屋を構え、次男重政は本家の広島浅野家家老職、三男可勝が肥後細川氏に仕官している。

上田宗簡は武人として知られるが、作庭師としても知られており、徳島城表御殿をはじめ、和歌山城西の丸庭園、粉河寺庭園、広島縮景園、名古屋城二の丸庭園などを作庭している。 また、茶道でも利休、古田織部に学び、上田宗簡流を立てた。

展示資料

1	畑田廃寺出土瓦 軒丸瓦	十六弁蓮華文軒丸瓦	
2	軒平瓦	三重弧文軒平瓦	
3	軒平瓦	均整唐草文軒平瓦	
4	畑田廃寺出土木簡	「秦」習字木簡	博物館レプリカ
5	畑田廃寺出土須恵器	「祢」墨書須恵器	
6		「三河」墨書須恵器	
7		「寺」墨書須恵器	
8		「榎」墨書須恵器	
9		「僧寺」墨書須恵器	
10	稻荷古墳出土遺物	出土須恵器	
11	古文書「上田宗簡畑田城跡之覚書」	古文書 享保六年正月	広島県三原市文化課所蔵品